

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 破

その7

今回のテーマ

今回扱っている作品、エヴァンゲリオン 新劇場版 破。

前々回からシンジの心性について考えてきた。

その中で2号機パイロットのアスカが3号機機動実験で搭乗した際に、精神に変調を来たし、使徒になってしまったという、この変調は今後、シンジが起こしていくであろう行動の暗示の様にも感じられる。

と述べてきた。

これは、アスカは、当初プライドが高く、自己顕示欲も強い性格。周囲を見下し、誰よりも上に立とうとする、被支配・支配的關係に拘る肛門期的性格であったが、そんなアスカが、シンジや綾波達と交流を重ねる中で、被支配・支配の肛

門期的 2 者関係から、心が成熟し、3 者関係のエディプス葛藤に向き合おうとする中で、3 号機機動実験の際に精神が侵され第 9 使徒と化してしまう。

その一連のアスカの変化が、シンジの心の動きと重なってくるのではないかと考えている。

シンジは序において綾波との交流を通じて、心を開き、自己愛的殻を破り、妄想分裂ポジションから抑うつポジションへ移行し、思いやりの心を持つ様になった。それにより、破において、相手に対して支配的で強がる一方で孤独感や寂しさを常に抱いていたアスカが心を開くきっかけとなり、鈴原トウジや相田ケンスケ達とも交流するようになり、和気藹々とした関係性を形成する様になっていった。それはその年代らしい同年代達の交流（チャムグループ）の様にも感じられる。

しかしそれはアスカが第 9 使徒に化してしまったことで、その交流は終わりを告げる。そこからこれまで何度も述べてきた Adolescence Process の始まりの様に感じられる。

cf. Adolescence Process の構図：平和な世の中で人々が暮らしていたが、突然脅威となる対象が出現し、これまでの秩序を壊し、周りの人々は混乱する。その中で主人公が自分の生きるべき道を見出し、成長していく。

ここでの脅威なる対象が、第9使徒に化してしまったアスカである。

しかしシンジはそんなアスカを受け入れられず、第9使徒に襲われ、父ゲンドウに「お前が死ぬぞ！」と言われても、「アスカを殺すよりはいい！」といい、シンジ自身が現実を受け入れ、成熟する過程（Adolescence Process）を拒絶してしまう。

その背景として、これまで孤独でひとりぼっちであったシンジにとって、アスカ達と交流していた期間は、短いながらも非常に充実して楽しかったと考えられる。その世界がなくなってしまうということ、それは他に後ろ支えが殆どないシンジにとって非常に受け入れ難いことであったのではないだろうか？

それゆえ、成熟への拒否をして今のままの状態でい続けようとしているように感じられる。（ここまでがⅡ 2）攻撃目標をシンジが目にして狼狽えるシー

ン)

その状況のシンジに業を煮やした父、ゲンドウは毅然とした態度で、初号機の制御をダミーシステムに変え（ここからがⅡ 3））、シンジが全く操作ができない中で、シンジの乗る初号機は、第9使徒の首を締め上げ、倒れた使徒に初号機は肉を食いちぎるように喰らい、最終的に初号機は第9使徒のエントリープラグを噛み砕いてしまう。

それは先述べた様にアスカの変化を受け入れられず、過去の幻影に囚われ、そしてそのアスカを倒す様強要されたとシンジは捉え、良いものと感じていた対象（クラインの考えでいくと、良い乳房）を無理矢理剥奪されたように感じ、それを強いた父、ゲンドウをはじめとした周囲に対して強い迫害感そして激しい怒りと憎しみを感じた（周囲を悪い対象と捉え強い迫害感を感じる）。

つまりシンジは妄想分裂ポジションに退行してしまったと考えられる。

そしてそのシンジの苦しみを誰も受け止めてくれる者は誰もおらず、事態はエスカレートしてしまい、ゲンドウは強硬手段しかとることが出来ず、二人の間は決裂してしまい、シンジは暴走し、NERVを破壊しようとしてしまう。

これはまさに Adolescence Process に伴う心の痛みを回避する心の動きである (Anti-thinking process ④考える事より行動)。

この周囲から剥奪されてしまったと感じる心性は思春期の彼らに多く見られるものと思われる。この年代の子達は主体性の確立並びに自立をめぐる葛藤の中で様々な選択や喪失の感情に襲われる。その中で彼らが受け入れ難い外的な変化（突然の引越し、両親の離婚、大きな怪我）が生じると、シンジのように周囲に対して強い迫害感を感じ、攻撃的になっていく（ある種のグレるということだろう）。それは現実に向き合えない、周囲を解ろうとしないが故の行動 (Anti-thinking process) ではあるが、大人達が彼らの苦しみに理解を示し、じっくり向き合う時間と空間があれば、彼らの迫害的な感情は和らぎ、成熟へと向かっていくのだろうが、なかなか一筋縄にはいかないように感じられる。

ここまでの一連のシンジの言動は

肛門期（二者関係）から徐々に人との交流で成熟するが、いざ、エディプス葛藤に移行し向き合おうとするや、その受け入れができず、暴走してしまう。

そのことをアスカの変化の変遷は象徴しているのではないかと考えてきた。

シンジの NERV の行動に対して誰も止められる者がおらず、父、ゲンドウが再び力でねじ伏せる様に LCL 圧縮濃度を限界まで上げシンジの行動を抑制し、気を失わせる。そしてシンジは夢をみる。

5) シンジの夢の世界

シンジは夢の世界で電車に乗っている。そこで綾波や幼き頃のシンジと対話している。それはシンジの内的世界とも感じられる。

そこで、綾波は序の電車の夢のときと同じ様に受容的にシンジの話しを聴きながら現実を直視させる様な発言をする。序では綾波の直面化させる言葉にシンジは揺さぶられる感じではあったが、今回の夢では同じ様に綾波は現実を直視させる言葉を投げかけるが、シンジの周囲への迫害感は変わることはなく、依然、父に対して強い敵意を抱き続ける。そして幼い頃のシンジが「そうやって嫌なことからまた逃げ出してるんだ」言った様に自分が再び自己愛的殻に閉じこもり、「いいじゃないか！嫌なことから逃げ出して、何が悪いんだよっ！」とい

う様に、それを正当化してしまう。アスカの喪失を受け入れられず、成熟する過程（Adolescence Process）への拒絶を宣言しているようにも感じられる。

そしてこの夢は次の父との対峙の際にシンジがとる行動の暗示の様にも感じられる。

6) 父との対峙

覚醒するとシンジは、隔離室に拘束され、その後、父がいる司令室に連れてこられる。

ゲンドウは司令席に座ったまま、顔の前で手を組んでシンジを見据えており、ゲンドウとシンジの距離は非常に離れている。

ゲンドウ「命令違反、エヴァの私的占有、稚拙な恫喝。これらはすべて犯罪行為だ。なにか言いたいことはあるか」

シンジ「はい。僕はもうエヴァには乗りたくありません」

ゲンドウ「そうか、ならば出て行け」

シンジは無言のまま出ていく。

ゲンドウ「また逃げ出すのか？ 自分の願望はあらゆる犠牲を払い、自分の力で実現させるものだ。他人から与えられるものではない。シンジ、大人になれ」

シンジ「僕には、何が大人か分かりません」

【考察】

司令室でのシンジと父ゲンドウの距離が非常に離れているように、二人の心の距離も離れている。実際ゲンドウの言葉を非常に正論であるが、どれだけ真っ当なことを言っても、冷たく言い放っているようで、シンジの心には響いてこない。今のシンジにとって大切なことは彼の心をきちんと受け止めてくれる対象であり、それは母親的存在である。しかしゲンドウは父親らしく毅然とした態度（ゲンドウのいう法律や罰というものは父親の象徴であり、ある種そういう父的对象の自己への取り込みが超自我となっていく）をとってしまっている。それ故にシンジは父に対して迫害的に捉え、自己愛的殻を強化させ、どんどんと心の

退避が起きているように感じられる。

その後葛城ミサトがシンジの心を受け止めようとするが、万事休す。シンジはミサトの家を出て、NERV から出て行ってしまう。

7) 喪失しかし躁的防衛に伴う心の現実の否認 世界の創生と破壊

NERV を出たシンジはシェルターで、ひとり座ってたたずんでいた。そこに爆発で吹き飛ばされてきた 2 号機が飛び込んできく。そして 2 号機の掌に乗り外の世界を見ると第 10 使徒が綾波の乗る零号機を食いちぎり、パイロットごと飲み込み、使徒はエヴァと一体化し、女性のような体つきになっていた。

その光景を見たシンジはエヴァに向かい、父と対峙する。

シンジ「僕は、エヴァンゲリオン初号機パイロット、碇シンジです！！」

そう言い、初号機に乗り、第 10 使徒と戦うシンジ。

しかしエヴァ初号機が第 10 使徒のコアに攻撃を仕掛けている時に活動限界を迎え、使徒の反撃を受ける。

シンジ「綾波を……返せ」

そう言いえヴァは暴走し、使徒に激しい攻撃を加える。

シンジ「僕がどうなったっていい。世界がどうなったっていい。だけど綾波は…

…せめて綾波だけは、絶対助ける！」

【考察】

父に対峙し、エディプス葛藤に向き合っているように見えるが、シンジの攻撃性

(aggression) しか見えない。シンジは NERV への攻撃性が父に抑え込まれ、自

己愛的膜にこもり、零号機が飲み込まれたことで再び第 10 使徒（対象）に攻撃

性が向かったように感じられる。綾波をどうしても取り戻したいとするシンジ

は綾波への愛の強さから突き動かされている。しかしそれは綾波の喪失を受け

入るのではなく、万能的に蘇らせようとするようにも感じられる。

そしてシンジは序で初めて使徒と対峙したときと同じ様に暴走する（解離する）

形で使徒を殲滅させている。つまり、序の初めの心性にシンジは逆戻りしてしま

っており、その中でシンジにとっての唯一の良い対象である綾波との結びつき

を強くさせようとしている様に感じられる。クラインは躁的防衛の「万能」に関

して、内的対象との関係では「対象は殺されるが、その主体（シンジ自身）は万能であるので、その死者達を直ちに生き返らせることができる」と述べているが、これはこのときのシンジ自身の心性を如実に表わしているように感じられる。

それが以下のやりとりで示されている。

シンジ「綾波、どこだ！」

綾波「ダメなの。もう、私は、ここでしか生きられないの……」

シンジ「綾波！」

綾波「いいの、碇君。私が消えても代わりはいるもの」

シンジ「違う！綾波は綾波しかいない！だから今、助ける！！」

その後シンジは綾波を救い出し、シンジと光に包まれながら、綾波と抱き合い天に昇っていく。

シンジ「綾波、父さんのこと、ありがとう……」

綾波「ごめんなさい。何も出来なかった……」

シンジ「いいんだ、もう。これでいいんだ……」

【考察】

シンジの綾波の一途な愛を示す非常に感動的なシーンだが、これは悪い対象によって奪われた良い対象を取り返すという万能空想であり、それが視聴者の心をうつものになっている。

それはなにか物語（とりわけロボットアニメ）の最終話でよく提示されるシーンのようにも感じられる

しかしシンジの心の観点から考えたときに、シンジ自身が抱く、思春期の喪失を受け止めきれないでいるように感じられる。そして心の成熟に向かうための過程（Adolescence Process）を何一つ進めていない様にみえる。序において綾波との関わりの中で一度は現実を受け入れ始め、破ではアスカや綾波との交流を重ね、他者との生き生きとした関わりを持ち始めるが、アスカが使徒に変わってしまったという喪失そして綾波も使徒に飲み込まれるという耐え難い喪失の感

情にシンジの心が受け止めきれず、妄想分裂ポジションの自己愛的世界に陥り、対象の喪失を完全に否認し、万能的な充足や歓喜の幻想にひたる躁的な心になっているように感じられる（躁的防衛）。（その世界が人類補完化計画のように感じられるのだが。）

躁的な世界では新しく理想化された輝く対象が熱望される。その対象に向けたさまざまな欲望や刺激的な考えが休みなく心に衝迫し、その対象との一体感体験へと絶えず駆り立てられる。一方でその妨げとなるあらゆるものには、容赦のない攻撃や破壊、非難が向けられる。そういうことがリツコの言葉に集約されているように感じられる。

リツコ「人の域に留めておいたエヴァが本来の姿を取り戻していく。人のかけた呪縛を解いて、人を超えた神に近い存在へと変わっていく。天と地と万物を紡ぎ、相補性の巨大なうねりの中で、自らをエネルギーの凝縮体に変身させているんだわ。純粹に人の願いを叶える、ただそれだけのために！」

リツコ「この世界の理（ことわり）を超えた新たな生命の誕生。代償として、古の生命は滅びる……」

リツコの発言はまさに躁状態の心性を述べている様に感じられる。それは人という存在を超え、自身がなんでも創造できる神に近い存在となっていくことである。しかし躁的世界は幻想であり、いつまでも維持できるものではない。いずれ排出されてきた悲哀がふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される。それがニアサードインパクトとして描かれている。

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わるが、今後、新劇場版 Q 以降では、その後、現実に戻されたシンジとそして周りの人々の苦悩と再生が描かれていくと考えられる。

【参考】妄想分裂ポジション・抑うつポジションとはなにか？

この心性は、当初は生後まもなくのなかで起きてくる心性。

乳児は、何もできない未熟な中で生まれるために死の恐怖に晒される。乳児にとって外界は荒涼とした世界で、死への世界だと感じているのではと考えられる。乳児自身に視点でいうと、乳児は栄養を与えてくれる乳房と常に結びついているという幻想を持つ。それを良い乳房と捉える。一方で乳房が「なくなる」とは受け入れられず、悪い乳房があると考え、それに対して迫害感を抱いたり、攻撃したりする。それで乳房を噛んだりする。これはある種妄想的であり、分割して排除して自分を守ろうとする心性である。この心性を**妄想分裂ポジション**という。

妄想分裂ポジションにあった乳児が母に抱えられ、徐々に乳児が成熟する中で、良い乳房も悪い乳房も同一であることを受け入れ、強い罪悪感と自責の念を抱く。そして乳児自身は良い乳房と結びついていないということを受け入れ、孤独感や喪失感を抱く。償いや修復への思いがでる。この心性を**抑うつポジション**という。ある種成熟した心性。

この妄想分裂ポジションから抑うつポジションへ移行は喪失と再生の過程で

あり、人生のうちに何度も繰り返される心性である。自身の受け入れられない喪失が生じると妄想分裂ポジションに退行していく。そして喪失を受け入れられた時に抑うつポジションに移行していく。その過程が繰り返される中で人は成熟を重ねていく。